

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	#askingthepopeforhelp. ヴァチカン出典資料に見るナチス政権によるユダヤ人犠牲者。オンライン版。プロジェクトの概要
Author(s)	ヴォルフ, フーベルト; ヒンケル, ザシャ; リヒター, エリーザベト=マリー ; シェーパース, ユーディット; シューラー, バルバラ
Citation	ぶらくしす , 23 : 65 - 77
Issue Date	2022-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/52233
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052233
Right	
Relation	



#askingthepopeforhelp.

ヴァチカン出典資料に見るナチス政権によるユダヤ人犠牲者。オンライン版。プロジェクトの概要

1

フーベルト・ヴォルフとチーム: ザシャ・ヒンケル、エリーザベト＝マリー・リヒター、ユーディット・シェーパースとバルバラ・シューラー

訳: 金田瑞樹

三つの運命

まだ一度もバラ色の明るい日を見たことのない私の若い人生の最後の一步を踏み出す前に、あえて尊師にお願いしたいことがあります。最も助けが必要な絶望的な状況で、私は閣下を頼ります。—私は 20 歳の青年で、イスラエル人です。私の揺りかごはベルリンにあり、その後、ポーランド、ベルギー、そして最後にフランスに導かれました。私は神学の学生です...

最近様々なことがあり、もうこれ以上続けられません。言葉では言い表せないほどです。私はもう限界です...

かろうじて、全能の神のおかげで、最悪の事態を脱し、今、非常に五里霧中な状態です。それゆえ、陛下にお願いします、私たちを助けてください。陛下、どうかベルンのスイス移民局に介入してください、少なくとも私は避難を許されるように、もし両親と 19 歳の弟が無理なら...

尊師の敬愛は4人の命を救うことができます。私たちに救ってください... 私たちに慈悲を...²

これらの涙ぐましい言葉とともに、20歳のユダヤ教ラビ候補生マルティン・ヴァクスケルツ (Martin Wachskerz) は、教皇ピウス12世に助けを求めた。彼の手紙は、1942年のクリスマスに、家族がナチスから逃れるために、まさに旅をし行き着いた南フランスのトゥールーズから書かれたものである。1942年11月にドイツがヴィシー (Vichy) を占領して以来、ユダヤ人難民を取り巻く状況は劇的に悪化した。強制送還と死が迫っていた。苦悩するヴァクスケルツは、自分と家族を救うために「ローマ法王陛下」を頼った。

シヨアの時代にそうしたのは、マルティン・ヴァクスケルツだけでは断じてない。

今日初めて、私は法王陛下に頼ります。私の苦難は私にとってあまりにも大きく、私は法王陛下の中に誠実な心が宿っていることをよく知っています。私はユダヤ人であることをお伝えしておかなければなりません。それゆえ法王陛下の門をたたく権利はありませんが、唯一の神が私たち人類を治めているという確固たる信念のもとに、あえてたたかせていただきます。

...ヒトラーが権力を握ると、帝国ドイツ人である私と愛する妻は1933年5月にすぐにブレーメンを離れ、アムステルダムに移住し...そこでうまく暮らしていました。私たちの一人息子は...1933年時点でブレーメンの市井の医師でした...彼はイタリアに行き...ローマに定住し、そこで大きな外科医院を持ち、金持ちにも貧しい人々にも人気がありました。

私と妻は、1937年までオランダに滞在しました。...私たちの息子は私たちを...彼のところに招きました...1938年9月、ユダヤ人に関する法律が...この夢に終止符を打ちました。息子と彼の妻は...パレスチナに行き、私たちもすぐに来れると約束しました...私たちが出発する準備ができたとき、イタリアで戦争が勃発しました。それとともに私たちの心配事も...そして今、私たちはひどくどうしようもない状態に直面しています...

さらに、先週の土曜日には、会計事務所からローマをすぐに離れるようにと呼び出されました...聖なる父よ、全能の神によって、私と私の愛する妻を助けてください。あなたは、すべての信仰者が知るように、すべての善行が最後報われることをよくご存じでしょう³。

ここでフランツ・ブリニツァー (Franz Brinnitzer) は、自分がユダヤ人であるため、ローマ教皇やカトリック教会には実は責任がないと正直に告白した上で、ピウス 12 世にイタリアからパレスチナへの移住の援助を求めた。他のいくつかの嘆願書と比べると、これは驚くべきことである。実際、教皇の私設秘書ローベルト・ライバー (Robert Leiber) は、推薦状の中で、「懇請の形式が少し妙である」と記している⁴。「ブリニツァー家はユダヤ人としてカトリックのローマで尊敬されている人々であり、いかなる支援も受けるに値する」とも彼は付け加えている。

あなたの足元で謙虚に祈る者は、イタリアのラビの長、ボローニャの由緒あるラビの長アルベルト・オルヴィエート (Alberto Orvieto) の息子です。彼は罪もなく、そして現在 78 歳、すべてを奪われ、72 歳の妻である私の愛する母とともに、牢獄に投げ込まれました。フィレンツェの病院で病床から引きずり出されたこの哀れな老人は、不快感や心の傷を乗り越えたでしょうか。

...しかし、どこに助けを求めればいいのでしょうか。最も恐ろしい武器を振りかざしている地上のあらゆる強者でさえ、私の困惑した視線の先には、丸腰に見えます。最も祝福された父よ、あなたの右手にのみ、過ちのない剣が光っています、真の正義の剣、愛の法の従者よ...

最も祝福された父よ、私の無限の悲しみを見下ろしてください、私の叫びを聞くことを拒まないでください、私の苦痛の募る魂が感じる唯一の励みを否定しないでください、私の傷を唯一香油のように癒すことのできるあなたの声を聞くことをお許してください、私はこの嘆願書をもって、あえて格別の謁見の機会を切願します⁵。

ボローニャのラビの長であるアルベルト・オルヴィエートの息子、アルトゥーロ・オルヴィエート (Arturo Orvieto) は、1944 年 1 月 3 日、この衝撃的な言葉とともに教皇に訴えた。この文章は、第二次世界大戦に関する文書を集めたフランス語圏のヴァチカン公式書類、すなわち「Actes et Documents」に 40 年前にすでに掲載されていた。それ以来この手紙は、第二次世界大戦中のユダヤ教信者がいかにローマ教皇を高く評価していたかを示す目的で、何度も引用されるようになった。しかし、この件に関する更なる資料の探究が試みられたが、その成果は得られていない。

プロジェクト

マルティン・ヴァクスケルツ、フランツ・ブリニツァー、アルベルト・オルヴィエーロ。彼らは第二次世界大戦中、ナチスの政治によって国外追放や殺害の危機にさらされ、ヨーロッパや世界中に逃亡せざるを得なかった 30 万人以上のユダヤ人のうちの 3 人に過ぎない。シヨアの犠牲者たちは手紙の中で、自らの人生を語っている。私たちは文字通り救いと命を乞う彼らの叫びを聞くことができるのである。

私たちは、ヴァチカン公文書館、正確には 1939 年から 1958 年まで教皇だったピウス 12 世の教皇職に関する所蔵品から、上記の引用文と他の何千もの嘆願書を発見した。これらの文書は、2020 年 3 月 2 日に研究者がアクセスできるようになった。そのとき、私たちミュンスターのチームは、たくさんの疑問を胸にローマに向かい、新しい資料の中にその答えを探した。

もちろん、それはホロコーストに関するローマ教皇の沈黙についてもそうだが、イスラエル建国に対する聖座の態度や、1945 年以降のヴァチカンの西欧との統合についてでもあった。基本的な目的はピウス 12 世の新しい伝記を提示することだった。しかしこれらの話題はいかに重要であろうとも、ユダヤ人が一人称の視点で書いた何千もの自己記録

(ego-documents) というユニークな資料群を前に、私たちドイツの神学者・歴史家としては二の次になってしまった。ドイツやヨーロッパ諸国における新たな反ユダヤ主義に鑑み、また多くのホロコースト生存者がすでに亡くなっていることから、ナチスが記憶を消そうとしたユダヤ人に声を与えることが急務であると考えている。そこで、彼らが聖座に送った嘆願書を、「#askingthepopeforhelp」と題したオンライン校訂版で研究および一般に公開することとするプロジェクトに思い至ったのである。

このプロジェクトは、これまでの教会史研究の狭い焦点を打ち破り根本的なパラダイムの転換を目指すものである。教皇だけに焦点を当てるのではなく、犠牲者の歴史を書くのである。これまでも迫害されたユダヤ人の救済活動は研究対象となってきたが、それはピウス 12 世を免責し彼がユダヤ人のために何かした¹ということを示すための、弁明の意図を持って行われることが多くあった。それに対して私たちのプロジェクトは、個々のユダヤ人と、彼ら自身が嘆願書の中で描いている彼らの運命を取り上げるものである。さらに、この不幸な人々の救済に関わったローマ教皇庁全体、修道会、教皇代理、司教、聖職者、信徒といった巨大なネットワーク、つまりトランスナショナルな機関であるカトリック教会全体にも焦点を当てるものである。

個々の運命を再構築するとき、ローマ教皇庁内の複雑な意思決定の過程が自動的に視野に入ってくる。聖座がどのようなケースでは救済の手を差し伸べ、どのようなケースではそうしなかったのか、それは誰が決めたのだろうか。どの時点で人々は救済の望みを叶えられ、どのような時それが叶わなかったのだろうか。

嘆願書は主にドイツ、ポーランド、フランス、イタリアから届いたが、他の多くのヨーロッパ諸国からも届いた。嘆願書を書いた人たちは、さまざまなユダヤ教の宗派、社会階層、世代に属していた。彼らの多くは、いわゆるカトリックの非アーリア人、つまり洗礼を受けたユダヤ人で、教会法の下ではカトリック教徒でありつつも、国家社会主義者からはユダヤ人種に属するものとみなされていた人々であった。女性、男性、そしておそらく子供たちによって書かれた手紙もあった。

嘆願者たちは経済的援助、教会施設での隠れ家や仕事、推薦状、逮捕・追放された親族の情報、強制収容所での支援、移住の支援、ビザやパスポート、船の通行のほか、少しでも迫害から守られるための洗礼など、さまざまな要求を出していた。

一見したところ、これらの自己記録はホロコーストに関する私たちの知識にあまり新しい情報を提供しないように見えるかもしれない。しかし、それぞれの資料が一人一人のユニークな人物の生涯を語っている。歴史家ソール・フリードレンダー (Saul Friedländer) が説得力を持って強調したように、これらの自己記録を扱うことはホロコーストに関するこれまでにない新しい視点への識見をもたらすのである。迫害された数多くの人々、それまで名前とわずかな個人情報しか知られていなかった人々が、私たちの心に呼び起こされるのである。多くの場合、手書きの手紙や自伝的スケッチは、彼らが殺される前に書いた最後の生きる自己記録なのである。

これらの重要な資料は学術的な基準に従ってアクセスできるようになり、デジタルで公開するだけでなく記憶の文化に強く焦点を当てた私たちのプロジェクトは、「反アンチセミティズム」教育という意味での政治教育に主眼を置いている。学術的な知識を広く一般に伝えること、そして市民科学が提供する多様な可能性を活用することが、私たちにとって最も重要なことなのである。

さて、冒頭で紹介した3人のユダヤ人とその請願書がどうなったか、もう少し詳しく見てみよう。教皇庁はいったい何をしたのか。そして、請願者たちはどうなったのだろうか。

新しい情報源

マルティン・ヴァクスケルツの場合、ヴァチカンのいわば外務大臣であるマリオ・ネグロ枢機卿（Cardinal Secretary of State Maglione）は、直ちにベルンの教皇代理の教皇大使、フィリッポ・ベルナルディーニ（Filippo Bernardini）にフランスから中立国であるスイスへの入国許可証を取得するよう指示した。しかし、スイス警察はこの要求を拒否した。ヴァチカン文書に書かれているのは、これだけである。ヴァクスケルツ一家のその後の運命は、もしあるとすれば、他の資料に基づいてたどるしかないがもちろんそれはかなり困難な作業である。

世界ホロコースト記憶センター、ヤド・ヴァシェム（Yad Vashem）のデータベースには、マルティン・ヴァクスケルツについて、1922年1月26日にベルリンで生まれたとする二つの同じ記録がある。両親はアルター（Alter）とツアルナ（Czarna）・ヴァクスケルツである。1942年から1944年まで、マルティンはフランスのニースにあるホテル・ブリistol（Hôtel Bristol）に滞在していた。彼はエルサルバドルに移住することを希望していた。しかし、彼のその後の運命に関する情報は欠落している。

ヤド・ヴァシェムのフランス委員会のホームページで、私たちはさらなる情報を得ることができた。ここには、ハインツ（Heinz）・ヴァクスケルツ、イスラエル（Israël）・ヴァクスケルツ、マルティン・ヴァクスケルツ、クラズワ（Craswa）・ヴァクスケルツなる人物4人の名前が挙げられている。名前の類似性は顕著だが、同じ人物について話しているのかどうかはまだわからない。逃亡中に痕跡を残すことは非常に危険なことであったことは覚えておかなければならない。今回のヴァクスケルツ家の調査は、ナチス政権のユダヤ人犠牲者に関する調査がいかに複雑になりえるかを示している。これはブリニツァー一家の運命についても言えることである。

フランツ・ブリニツァーの嘆願は1942年6月末、ライバーの推薦書はその6週間後に書かれ、9月中旬には教皇庁の國務省でこの問題が扱われることになった。國務枢機卿代理のジョバンニ・バティスタ・モンティーニ（Giovanni Battista Montini）は、ピウス12世に私的に謁見した際にこの件を持ち出した。その後、彼は教皇の決断をこう記した。「1942年9月24日の教皇との謁見より。難民のための基金から申立人に500リラを付与。ジョバンニ・バティスタ・モンティーニ」⁶。10月7日、モンティーニは500リラの小切手をライバー神父に送り、「無数の要望と困難な状況」に鑑みて、聖なる父がこれ以上の援助金を与えられないことを残念に思っていると告げた⁷。

ブリニツァーの嘆願から教皇庁の救済基金から 500 リラが支払われるまで、3 カ月以上かかった。なぜ、これほど時間がかかったのだろうか。皆さんは疑問を抱くだろう。私たちは、毎日毎日、膨大な量の請願書が教皇庁に届いていたからだと思っている。しかしその間にフランツ・ブリニツァーは、自分と妻のメタ (Meta) をナチスの魔の手から救うさらなる方法を考え、再びライバー神父を頼った。

捕虜の交換作戦が行われるらしいとの噂が流れた。イギリスがパレスチナで捕虜にしているイタリア人と、イタリアに取り残されているユダヤ人を交換するというものだった。もしかしたら、これがブリニツァーの考えたヨーロッパ脱出の方法だったのかもしれない。ライバー神父はこの嘆願書をモンティニーニに渡し、モンティニーニはヴァチカンの英国大使館にこのような交換が、主に家族の再会の一環として可能なのか質問した。大使館からはすぐに「できない」という答えが返ってきた。しかし、ブリニツァー家の息子であれば、両親のためにパレスチナへの入国ビザを申請できるのではないだろうか。モンティニーニは、この返事をライバーに送るほかなかった。

ヴァチカン公文書館にあるブリニツァーのファイルはこのように終わっていた。聖座と英国政府との外交的解決は残念ながら失敗し、夫妻の息子、ハインツ・ブリニツァーは、実は 1939 年にすでに両親の入国ビザを申請していたが、それも無駄に終わった。フランツとメタ夫妻はその後数ヶ月間どのようにして生活していたのか見当もつかない。教皇庁の救援金 500 リラがしばらくの間彼らの生活を支えたことは確かだろう。1943 年 10 月にローマのユダヤ人が強制送還されたとき、ブリニツァー夫妻がイタリアの首都にいたかどうかはわからない。もしいたとしたら、彼らは強制送還された人々の中には入っていたはずだろう。しかし、「ドイツにおける国家社会主義専制下のユダヤ人迫害の犠牲者に関する記念誌」によると、彼らは 1944 年 6 月初旬にフィレンツェで逮捕され、アウシュヴィッツで殺害されたとのことである。

アルトゥーロ・オルヴィエートに何が起こったか見てみよう。教皇に宛てた彼の手紙を編集する際、「Actes et Documents」の編集者はミスをしてしまった。文書の見出しに「ラビ・オルヴィエートから教皇ピウス 12 世へ」と書かれている⁸。実際、教皇に手紙を出したのはラビのアルベルトではなく、息子のアルトゥーロだった。この間違いの理由については、推測を差し控える。

編集者は脚注で、聖座は 4 月にイタリアのミラノ大司教とカルピ司教に、そして 1944 年 5 月にはベルリンの教皇大使にラビを支持するよう介入したことを指摘している。

聖座はイタリアのラビの長を擁護することさえした。これが「Actes et Documents」からわかることである。しかしオルヴィエートの運命についてそれ以上の情報はこの文書からは得られなかった。

これまで知られていなかったメモから、弁護士「ヴィラヴェッキア (Villavecchia)」—これはアルトゥーロの偽名である—が、彼の両親が逮捕された後何度も国務省を訪れたことがわかった。そして実際マリオネは前述の司教たちに、「彼らの悲惨な健康状態と汚れない市民権の記録」を考慮し、オルヴィエート家の釈放を当局に申し立てるよう頼んだ⁹。1944年4月にオルヴィエート家がドイツに「移送」されたというニュースがローマに届くと、国務長官は直ちにドイツの教皇大使に彼らのために介入するように指示した¹⁰。ヴァチカン公文書館にあるオルヴィエート家関連の文書はこのような形で終わっていた。

今日私たちは、1944年の春マリオネと国務省全体が知りえなかった残酷な結末について確かな情報を持っている。現代イタリアにおけるユダヤ人の出来事、文化、状況についての研究を推進するミラノの機関、現代ユダヤ人文書センターのデータベースには、アルベルトとその妻マルゲリータ (Margherita) がミラノからアウシュヴィッツに強制送還され、1944年2月6日にそこで殺害されたと書かれている。

アーカイブ

これらの例は、ヴァチカン公文書館がショアの犠牲者に関する新しい情報を確かに提供してくれることを示している。同時に、ヴァチカンの資料だけでは、ユダヤ人請願者の運命を完全に再現することはできないことも証明している。そのため、他の機関や学者そして熱心な市民との協力が必要である。私たちのプロジェクトは、ホロコースト研究に関する世界的なネットワークに貢献することを目的としている。

ところで、もしあなたが、すべての請願書がヴァチカンの一つのフォルダや双書にきちんと収納されていると期待するならば、がっかりすることとなるだろう。むしろ、それらは多数の独立したアーカイブや双書で見つけることができるのである。

ヴァチカン使徒文書館 (Vatican Apostolic Archives or AAV) では、特に「援助のための教皇委員会、章一人種」 (“Pontifical Commission for Assistance, section Race”) の双書が私たちには重要である。この双書は約 300 冊の冊子から成り、それぞれの冊子には平均 10 件の「事例」が収められており、しばしば家族全体や友人関係に関するものが含まれている。約 9,000 人の個人に関する資料がある。

さらに AAV は、ベルリン、ベルン、リスボン、マドリッド、パリ、ローマ、ソフィア、東京、ワルシャワ、ワシントンなど、世界中のローマ教皇庁大使館と代表団、つまり聖座の外交機関のアーカイブを保管している。これらの資料には、各教皇庁代表に対する無数の請願書とその回答が収められている。教皇大使は、請願者の支援を直接拒否するか、積極的に支援するか、もしくはローマ教皇庁に請願を転送することもできた。その場合、彼と国務省や他の省との間でしばしば文通が行われ、他の教皇庁大使館を巻き込むこともあった。例えば、あるユダヤ人の家族や人物が海外に移住したという証拠がヨーロッパの大使館で見つかった場合、アルゼンチンやブラジルの大使館文書から、南米への移住について結論を導き出すことができるようになる。したがって、現在 AAV でアクセス可能な 72 の教皇庁大使館のアーカイブのすべてを、このような「事例」のために系統的に検索する必要がある。いくつかの教皇庁大使館のアーカイブはまだアクセスできず、時間の経過とともに開かれる予定になっている。

国務省の独立したアーカイブは、いわばヴァチカン外務省のアーカイブである。そこでは国別に資料が保管されており、つまりこれらの所蔵資料は教皇大使館のアーカイブと対をなすものであり、後者と同様に体系的に再調査されなければならない。さらに、私たちのプロジェクトに最も関係の深い双書「ユダヤ人」という特別なセクションが作られた。この双書は、約 7000 人の個人に関するおよそ 3000 件の請願書を収めた 170 箱からなる膨大なものである。

教理省 (Congregation for the Doctrine of the Faith : 略称 ACDF) のアーカイブでは、迫害されたユダヤ人についての言及はごくわずかだった。ACDF に保管されている文書では、カトリック教会がユダヤ人にどう対処したかという問題はむしろ高次のレベルで浮かび上がってくる。例えば、ルーマニアのユダヤ人が国家社会主義者の迫害から保護されるために急遽洗礼を願い出た場合、義務である 1 年間の準備を省いても良いのか、悪いのかといった問題である。

ヴァチカン公文書館で、ヨーロッパからの移住を目指すいわゆる「カトリック非アーリア人」が、しばしば国務省からパロッティ会 (Pallottines) に照会されていたという証拠に行き当たった。パロッティ会とは、19 世紀以来カトリック教徒の海外移住の支援に携わってきた修道会である。ローマにあるパロッティ会総本部の資料の中に、ヴァチカンの資料で目にしたユダヤ人の運命を追跡することができる資料を見つけた。このようにして、例えば、彼らがリスボン経由で南アメリカに移住することができたか、あるいは少なくともそれを目指していたかなどを知ることができる。

サルバトール会 (Salvatorians) とイエズス会 (Jesuits) という 2 つの修道会の資料も同様である。

目標

すでに分かる通り、私たちはたくさんの目標を掲げている。しかし私たちのプロジェクトは、いったい何を達成しようとしているのだろうか？

まず第一に、ヴァチカン公文書館にあるすべての関連資料、とりわけ請願書を回収し、記録し、重要なオンライン版として研究者や一般の人々が利用できるようにしたいのである。これだけでも数年は掛かり切りになるであろうほどの膨大な作業である。さらに、本講演の冒頭でマルティン・ヴァクスケルツ、フランツ・ブリニツァー、アルベルト・オルヴィエートとその家族の事例について行ったように、研究文献の助けを借り、他のデータベースを用いて、いくつかの事例を抽出してさらに調査を行う。

まさにこの個人の人生と運命の再構築は、ドイツだけでなく全世界のホロコーストの記憶という文化にとって最も重要なことなのである。だからこそ、私たちはユダヤ人犠牲者の書いた自己記録と私たちが再構築を目指す人生の物語を伝記学習という意味での政治教育活動に利用したいと思っている。

オンライン版

では、どのようにデジタルプラットフォームを構築していくかを説明しよう。

このプロジェクトのホームページは、ドイツ語と英語の両方で提供され、世界中の人々がアクセスできるようにする予定である。そこでは様々なタグや検索オプションがあり、ヴァチカン公文書館にある文書、人物、キーワード（ドイツによるローマ占領、亡命の可能性など、個々の問題についての解説）、場所などを検索することができる。

文書は全文が編集され、他の文書、経歴、キーワードへのリンクが付く。そのため、例えばベルリンやヴァチカン市国といった個々の場所と、どの文書や人物と繋がりがあるかを確認することができる。このように、さまざまな個人の運命を相互にリンクさせることでそのつながりを認識することができ、ひいては地域レベルの研究のきっかけになるかもしれない。さらに、迫害された人々だけでなく資料の中で言及されたすべての人物のアルファベット順のリストも用意される。そのため、前述のヴァクスケルツ家のように助けを求めた人々だけでなく、リスボン経由で海外に移住する多くの人々を支援したパロッティ

会神父アントン・ウェーバー (Anton Weber) のように、支援に関わった人々の名前とエピソードも掲載される。さらに、それぞれの人物のプロフィールは、ヤド・ヴァシエムなどのデータベースとリンクされる予定である。

Web 表示の裏側には、個々のデータをつなぐデータベースがある。一つ一つの文書、キーワード、経歴はすべてそれぞれの XML ファイルに格納され、一意的な ID によって参照される。名前、場所、個人、宗教など、個々の情報を読み込み統計的に評価するためには、タグ付けが必要であり、部分的に、特に場所については自動化されている。場所、機関、人物などの対象物のための永続的な識別子などのセマンティック・ウェブ技術のおかげで、ウェブサイトはオンラインで利用可能な「世界の知識」に接続され、積極的にそれに貢献することができる。このように、私たちが自らコンテンツをプロジェクトに送り込むことなく、自動的に情報をリンクさせることができるのである。

教育活動

では、私たちが言及した政治教育活動や知識の伝達とは、どのようなものなのだろうか。

私たちの研究を伝えるという点では、ウェブサイトだけでも軽視できない面がある。一部の専門家しか読めず、図書館の片隅で埃をかぶっているような本の中に情報を隠してしまっただけでは何の意味もない。最終的に私たちのプロジェクトは、専門家だけでなく特に関心のある一般の方々を対象としている。

私たちは、このプロジェクトの進捗を常に一般の方々にお知らせしていく予定である。初めに、例えば国内外の新聞や雑誌の記事、紙媒体のインタビュー、ラジオやテレビ番組、ポッドキャスト、ドキュメンタリー番組など、今日のサイエンス・コミュニケーションの古典的な手法を用いていく。また、映画や短編ドラマも検討している。これについてはこのプロジェクトとは別の文脈だが、私たちはすでに良い経験を得ている。新しい課題としては、ソーシャルメディアとの連携も考えている。

このプロジェクトは、ホロコーストへの感性の絶えざる更新と真の「反アンチセミティズム教育」という意味で、継続的に利用することができる。巻き込まれたユダヤ人はヨーロッパのさまざまな国から来た人たちなので、グローバルな枠組みで行われることになる。

個々の運命や事例集に関する教育アプリを開発し、さまざまなメディアやコンセプトを利用することで、得られた洞察を多様な対象グループに伝えることができるようにする。それは社会全体に対する政治教育から、学校の教育カリキュラムに対応したテーマを打ち出すことも含む。例えば、ドイツで市民教育や政治に関する情報を市民に向けて提供している連邦政治教育センター（Bundeszentrale für politische Bildung）とは、現在協議を進めているところである。学校、追悼施設、博物館などで使用できるよう、生徒向けの教材を準備し、デジタルとアナログの循環型展覧会を企画する予定である。

私たちの考える政治教育とは、一方的な知識の伝達ではない。むしろ、文書の翻刻に貢献することなどの市民科学者の積極的な参加に関心がある。何といてもそれらはイタリア語はもちろん、ラテン語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、ポーランド語、チェコ語、ルーマニア語など、さまざまな言語で書かれている。私たちのチームはこれらの言語のいくつかを知っているが、すべてを知っているわけではない。さらに、市民科学者は親族や地元の研究によって浮かび上がってきた人など、私たちがアクセスできない個人に関する重要な情報を提供することができる。

ローマ法王に助けを求める（Asking the Pope for Help!）。私たちのプロジェクトはその基本設計として、被害者中心、ヨーロッパ・グローバルであり、そしてデジタルに構想されている。私たちは、有名人ではなく、私たちが新しく利用できるようになったピウス 12 世の教皇職に関するヴァチカン所蔵品から見つけた書類の中で自らの物語を語っている、ナチスの迫害を受けた無数の犠牲者を中心に据えることで、パラダイムの根本的な転換を図ろうとしている。これらの文書をデジタル化し編集することによって、私たちは、ホロコーストに関するローマ教皇とカトリック教会の沈黙についての議論に重要な貢献をすることとなる。

このプロジェクトは、テオドール・W・アドルノ（Theodor W. Adorno）の言うところの「成熟への教育」に貢献することを目的としている。犠牲者の声を再び聞こえるようにすることで、「忘れないための記憶」が本当に行われるように貢献したいと思う。

注

¹ この寄稿で紹介する概要は、2020年3月2日にアクセス可能となった教皇ピオ 12 世の教皇職に関するヴァチカン公文書館の所蔵資料、正確には「ピウス 12 世とホロコースト」に焦点を当てた資料での研究に基づいている。私たちの研究は、2020、21年にアルフリート・クルップ・フォン・ボーレン・ウント・ハルバッハ財団（Alfried Krupp von

Bohlen und Halbach-Stiftung) の寛大な支援を受けた。2021 年 11 月には、「教皇に助けを求め」と題するプロジェクト案が evz 財団 (Stiftung Erinnerung Verantwortung Zukunft) によって承認された。ここに印刷されたテキストは、英語版ビデオのベースとして作成されたものであり、そのビデオは www.askingthepopeforhelp.de でアクセスできる。本論考では、様々な理由から関連文献の紹介は控えた。第一に、新たに入手可能となった資料に関する関連研究は、これまで発表されていない。しかし Johan Ickx, *Le Bureau. Les Juifs de Pie XII, Neuilly-sur-Seine 2020* (ヨハン・イクス著『オフィス、ピウス 12 世のユダヤ人たち』) は例外と言えるかもしれない。第二に、公文書館公開以前のピウス 12 世に関する文献は豊富にあり、関連する書誌に容易にアクセスすることが可能である。第三に、プロジェクトチーム自身が最初の研究成果を発表したことである。Hubert Wolf et al., *Die Öffnung der vatikanischen Archive zu Pius XII. - März 2020. Ein Dossier*, in: Rolf Hochhuth, *Der Stellvertreter. Ein christliches Trauerspiel*, Hamburg 2021, p. 529-555. (フーベルト・ヴォルフ他. ピウス 12 世へのアーカイブの開放) したがって、ここではヴァチカン資料からの引用のみを行う。

- ² Martin Wachskerz to Pius XII, 20 December 1942; Archivio Apostolico Vaticano (AAV), Segreteria (Segr.) di Stato, Commissione Soccorsi 302, fasc. 1, fol. 33r-33v.
(マルティン・ヴァクスケルツからピウス 12 世へ) 手紙の原文はドイツ語。
- ³ Franz Brinnitzer to Pius XII, 27 July 1942; AAV, Segr. Stato, Commissione Soccorsi 301, fasc. 21, fol. 23r-24v. (フランツ・ブリニッツァーからピウス 12 世へ) 手紙の原文はドイツ語。
- ⁴ Robert Leiber to Mario Brini, 16 August 1942; *ibid.* fol. 22r. (ロバート・ライバーからマリオ・ブリーニへ)
- ⁵ Arturo Orvieto to Pius XII, 03 January 1942; Archivio Storico della Segreteria di Stato, Sezione per i Rapporti con gli Stati (ASRS, Fondo Sacra Congregazione degli Affari Ecclesiastici Straordinari (AA.EE.SS.)), Pio XII, Ia parte, Ebrei 101, fol. 65r. (アルトゥーロ・オルヴィエートからピウス 12 世へ) 手紙の原文はイタリア語。
- ⁶ Notes of the audience of 24 September 1942; AAV, Segr. Stato, Commissione Soccorsi 301, fasc. 21, fol. 20r. (1942 年 9 月の聴講記)
- ⁷ Giovanni Battista Montini to Robert Leiber, 07 October 1942; *ibid.* fol. 26r. (ジョバンニ・バティスタ・モンティーニからローベルト・ライバーへ)
- ⁸ “Le rabbin Orvieto au Pape Pie XII”; Pierre Blet/Angelo Martini/Burkhard Schneider (eds.), *Actes et Documents du Saint Siège relatifs à la Seconde Guerre Mondiale*, 11 vols., Città del Vaticano 1970-1981, here vol. 10, n° 2, p. 65f. (ラビ、オルヴィエートからピウス 12 世へ)
- ⁹ Undated pro-memoria; AAV, Segr. Stato, Commissione Soccorsi 303, fasc. 1, fol. 150r. (日付のない記録)
- ¹⁰ Luigi Maglione to Cesare Orsenigo, 09 May 1944; *ibid.* fol. 157r. (ルイーダ・マリオーネからシーザー・オルセニゴへ)